

**PRESS RELEASE**

**プレスリリース**

# SOUL @ AFRICA

アフリカの魂

リンクするアフリカルチャー  
Linking Africulture

2011.7.16 Sat → 9.19 Mon



多摩美術大学美術館

〒206-0033 東京都多摩市落合1-33-1 TEL.042-357-1251 FAX.042-357-1252  
E-mail:museum@tamabi.ac.jp URL.<http://www.tamabi.ac.jp/museum/>

## 1. 企画主旨

2010年ワールドカップサッカーの開催で、何も彼もが話題となり世界の注目を集めた、アフリカ。近年、多くの国際美術展や美術館での企画展やコレクションにおいて、現代アフリカ美術が取り上げられることも珍しくなくなってきました。それらは欧米主導の美術の流れとは異なる、独自の発展と世界観を持つ文化や芸術性の高さから、欧米のアートシーンにも刺激と影響を与え続けています。

そのアフリカのアートシーンを牽引したのは、欧米流のアカデミックな美術教育を受けていない伝統的な工芸品の制作をするなかで、美術表現を習得し、独創的な作品展開をしてきた“ストリート派”と呼ばれる潮流です。従来、アフリカでは祭祀や儀礼を行う伝統的な彫刻・工芸(仮面や椅子、杖、染織、宝飾など)が、主として農村など地方の共同体で脈々と制作されていました。しかし、近代化が進み急速な都市化と、都市の中に流入した(欧米を中心とした)外国文化とアフリカ伝統文化の接触、融合により、新しい美術表現の可能性が生まれて行きました。伝統と現代性の両面で独創性をもつアフリカ美術が注目された1989年パリのポンピドゥーセンター「大地の魔術師」展をはじめ、アフリカ系キュレーターの抜擢による2002年のドイツ・カッセルの「ドクメンタ11」、2004年からドイツ、フランス、英国、日本などでの巡回展「アフリカ・リミックス」展、2006年に欧米以外の美術専門のパリ「ケ・ブランリー美術館」のオープンなどは、1990年代以降のアフリカ文化への注目度の高さを象徴しています。

この世界を席捲しているパワフルな現代アフリカ美術の流れを理解する上で、欠かすことのできないのは伝統的な美術工芸に見る圧倒的なエネルギーと優れた造形性です。現代アフリカ美術の登場を待つまでもなく、西洋近代美術の発展と改革には多くのアフリカの造形が関与、影響してきました。例えばキュビズム、シュールレアリスムなど革新的な美術運動を推進したピカソ、ミロ、マティス、エルンスト、ブルトンなども熱心なアフリカ美術のコレクターでした。

これまで多摩美術大学美術館では、そうしたアフリカ文化への関心を先取りするように「サナーヤ・アフリカ—現代アフリカ美術に宿るもの」(2000年)「ポスト! 現代南アフリカ写真」(2004年)「ジョージ・リランガー—この世は精霊たちとともに」(2006年)などのアフリカ美術をテーマとした展覧会を開催してきました。それらはアフリカ文化研究家であり、貴重な作品・資料の蒐集した故白石顕二氏(1946-2005)の協力無しには実現し得ないものでした。同氏が生涯をかけたアフリカ文化への情熱と取り組みは、人類史と現代社会の根底にある諸問題への批判と克服を目指した道程でした。人類の起源といわれるアフリカの地に足を運び、その数奇の歴史と現代の状況を伝統文化から現代文化までを俯瞰する目線と、アフリカに生きる民衆や知識人たちとの交流により、アフリカ文化の根源的エネルギーとアフリカの造形に見る独自性にいち早く着目したのです。

本展では、そうして白石氏により蒐集されたアフリカ文化に関する貴重な作品、資料群である「フリーダ・コレクション」を紹介することにより、真のアフリカ美術の全貌と本質を理解するための礎になると考えます。それは単に美術にとどまらず、音楽やダンス、演劇、映像、ファッション、文学など、多彩な文化全般の影響関係の下、従来のジャンルや歴史観では分類しきれない、交錯し融合する多重的表现世界であり、背景としての政治や経済事情にいたる社会情勢とも連環します。それはまさに混迷する現代世界を凝視する声無き声としてのアフリカからの魂の叫びであり、そうしたアフリカ文化への魂を賭けた取り組みの発現なのです。この展覧会はアフリカ美術の歴史的な系譜としての位置づけだけではなく、世界的なアートシーンの未来を予感させるものとなるでしょう。

### 本件に関するお問い合わせ

#### 多摩美術大学美術館

〒206-0033 東京都多摩市落合1-33-1  
TEL 042-357-1251 FAX 042-357-1252  
Eメール hkobayashi@tamabi.ac.jp  
URL <http://www.tamabi.ac.jp/museum/>  
学芸員 小林 宏道・淵田 雄・吉田 公子  
本展担当 小林 宏道

## フリーダ・コレクション (Frida Collection Tokyo) について

この展覧会を構成する「フリーダ・コレクション」(Frida Collection Tokyo) はアフリカ文化研究家の故白石顕二氏(1946-2005)とアート・プロデューサーの山本富美子氏(白石顕二夫人)が1970年代初頭より行ってきたアフリカ取材の中で各地の美術・工芸品を蒐集してきたものです。このアフリカン・アートのコレクションは白石氏がアフリカの都市文化を研究するフィールドワークを行うなかで、1970年代末からのタンザニアのティンガティンガ派絵画、「芸術の家」のジョージ・リランガらの東アフリカ作品、1980年代からの西アフリカや中央アフリカのユニークな現代美術作品などと出会い、同時に並行して、数多くの工芸品や装飾品、装身具、染織品などへと展開しています。それらは容易ならざる蒐集の賜物として、アフリカの現代美術から歴史的な工芸美術文化の世界までを総合的に概観しており、長年のフィールドワークによって培われたアフリカ文化への造詣の深さと独自の視点に裏付けられた作品群を形成しています。

現在までの日本の美術館においてアフリカの歴史的な美術から現代美術に至るまでの系統的な蒐集や研究を行っているところはいまだ皆無に等しい状況です。しかし、海外でのアフリカ文化・芸術、ことに現代美術の趨勢へのアプローチを展開する上でも、すでに実際の作品がこれだけ総合的に蒐集されて日本国内に存在しているということの意義は大きいといえます。

また、コレクションには蒐集された作品に関連する多数のレファレンスブックが付随しており、単なる好事家的な収集ではなく、その歴史的、学術的背景も加味した精査を経た蒐集であったことがわかります。さらに白石氏はアフリカ文化への探求を進めるのに、多相的なアプローチを不可避と考え、音楽やダンス、演劇、ファッション、文学・・・といった多方面での取材や素材・資料収集にも勤しみ、中でも映画の総合文化性に着目し、1980年代から6度にわたるアフリカ映画祭を東京で開催することに尽力し、プロデュースしました。その中で多くのアフリカ映画人、文化人たちとの交流も盛んに行われていました。そうした活動の賜物としてのフリーダ・コレクションは、単なるアフリカ趣味の集積物とは本質的に異なり、他の追従を許さないものです。

このコレクションの全貌を展覧することは、そこに集積された秀逸なアフリカ文化への独自の視点を体感出来ると共に、アフリカ文化と日本文化の将来的な交流と発展を占う重要な可能性も秘めていると言えるでしょう。

## 2. 開催要項

**展覧会名：** SOUL@AFRICA : Linking Africulture  
アフリカの魂ーリンクするアフリカルチャー

**会 期：** 2011年7月16日(土)～9月19日(月) 10:00～18:00 (入館は17:30まで)

**休 館 日：** 火曜日

**入 館 料：** 一般 300円(200円) 大・高校生 200円(100円)  
障害者および中学生以下無料 ※ ( )内は20名以上の団体割引料金

**交 通：** 京王線・小田急線・多摩モノレール 多摩センター駅下車徒歩5分

**主 催：** 多摩美術大学美術館

**監 修：** 小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)

**企画構成：** 小林宏道(多摩美術大学美術館学芸員) / 山本富美子(フリーダ・ジャポン)

**協 力：** Frida Collection Tokyo

**提 携：** 公益財団法人 多摩市文化振興財団

**関連事業：** 会期中、講演会やギャラリートーク、アフリカ音楽イベント、アフリカ映画の上映プログラム等も予定している。

### 【トーク】

「アフリカへの熱き思いー白石顕二とフリーダ・コレクションの軌跡」

講師

ムバイ・チャム(ワシントンDC ハワード大学アフリカ研究科教授)

未定

小林宏道(多摩美術大学美術館学芸員)

2011年8月13日 14:00～

### 【アフリカンドラムライブ】

出演：オスマン・オルランド・ビングル、多摩美術大学ジャンベ民族部

2011年8月13日 16:30～

### 【映画上映】

会場：バルテノン多摩 小ホール

8月11日(木)・12日(金)

1回目 11:00～13:40、2回目 15:00～17:40

上映作品(3本立て)

「生命の木」監督アブドルカディール・アールド・サイド(1987年、25分)

「シーシェル」監督アブドルカディール・アールド・サイド(1991年、30分)

「テストメント」監督ジョン・アコムフラー(1988年、80分)

入場無料

定員300名 ※定員に達した場合、入場を制限させていただきます。

**展示内容：** この展覧会では、アフリカの伝統的な民族文化で息づいてきた彫刻・工芸作品から、世界的に注目される独自性に富んだ現代のアフリカ美術までを、西アフリカ、中央アフリカ、東アフリカ、南アフリカ等の諸地域の作品について紹介する。

展示としては、以下の3部構成を基本とし、各パートにおいて工芸の種別、染織の種別、作家毎の分類をしながら相互の影響関係なども俯瞰できるようにする。

#### 1. 伝統的造形に見る現代性(立体編)(約50点)

アフリカ諸地域のアフリカの立体造形として古代遺跡から発掘されたテラコッタ彫刻から、木彫像、仮面、椅子、枕、杖などの彫刻・工芸など。

#### 2. 伝統的造形に見る現代性(テキスタイルと装身具編)(約100点)

アフリカ諸地域の多彩で独自性のみられる意匠や文様が施された染めや織、樹皮布、草ビロード、ケンテクロスといったテキスタイルと、装身具を紹介する。

#### 3. 伝統から発展した現代アートの世界(約80点)

伝統工芸を土台としながら、アノミマスではなく国際的に注目される独自の表現世界を展開するアーティストによる現代アート作品の紹介。

## 1. 伝統的造形に見る現代性（立体編）

この度出品する彫刻や仮面、工芸の多くにはアフリカ大陸に生きる人びとと精霊や自然との交信・祈りが表された作品が含まれています。出産や豊饒のシンボルでもあった子安貝を纏った男女一対となるイベ人形（画像1）や、月神とも太陽神とも言われ、災難除の力を持つバウレ族のプレプレ面（画像2）などは、興味が尽きない造形と共に彫刻や仮面が創り出されたバックグラウンドを雄弁に語っています。また、装飾的にあしらわれた人頭形や鳥、小動物にもやはり精霊と民族の関わりが刻み出され、そこに民族の心を知ることができるでしょう。

展示作品の多くは木製ですが、紀元前に遡り、髭をたくわえ両眼の周囲に頂点を下にした三角文様を持つ典型的なノク時代のテラコッタ立像頭部（画像3）や儀礼との関わりを強く感じさせる鉄製の仮面（画像4）や人型像など、素材の違いからもアフリカの立体をご覧ください。

この立体造形のセクションでは、仮面（約15点）、彫刻（約20点）、枕や椅子などの工芸品（約20点）を出品いたします。これを地域別にみれば、西アフリカ（約39点）が最も多く、次いで中央アフリカ（約19点）、西・南アフリカ（各2点）となります。

これらの造形には、それぞれの「役割」において期待される「効力」が視覚化され、時には表象として強調され、また時には要素が組み合わされて強い個性を放っています。どの作品にも共通する「アフリカ作品の力強さ」。この点を感じることは、造形と表現の根拠を根底で支えるアフリカの大地と人びとの「魂」を知ることには違いありません。本展示からもこのことを感じていただければ幸いです。出品作品のコレクターはまさにこの「魂」に触れて響き合い、コレクションが始まったのでした。



1：イベ人形（子安貝の衣付）、ナイジェリア連邦共和国、ヨルバ族



2：プレプレ面、ナイジェリア連邦共和国、バウレ族



3：立像頭部、ナイジェリア連邦共和国、ノク時代



4：鉄仮面、マリ共和国、ドゴン族（or ジェンネ）



5：立像、マリ共和国、ドゴン族

## 2. 伝統的造形に見る現代性（テキスタイルと装身具編）

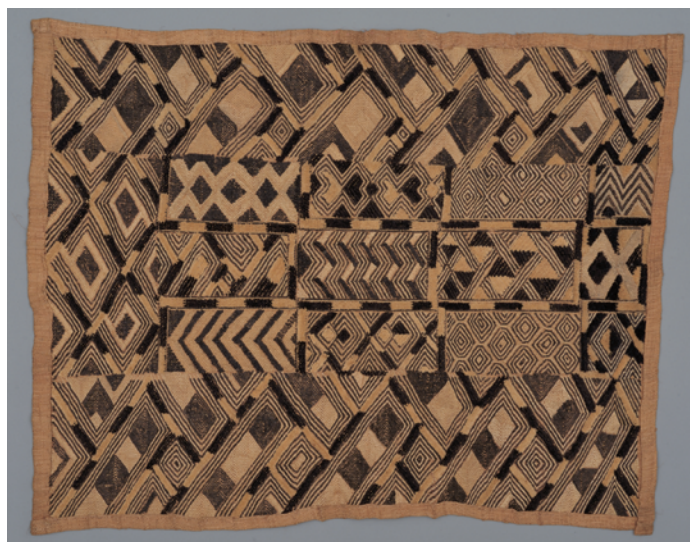
アフリカのテキスタイルは、地域によって豊かな多様性が認められます。さまざまな民族性や歴史性をもつアフリカ文化の所産に出会ってきた白石顕二氏にとって、アフリカ独自の世界観が色濃くみられるテキスタイルや宝飾品についても、重要なコレクションとなりました。この展覧会では西アフリカ、中央アフリカ、そして東はマダガスカルにおける11ヶ国のテキスタイルを約100点紹介いたします。

アフリカのテキスタイルの素材となる繊維や染料は、植生に応じて工夫されてきました。技法については地域によって染め、織、絞り、刺繍、カットパイル、アップリケなど多岐にわたります。例えばクバ王国、ブジョング族（コンゴ共和国）による“ンチャク（画像1）”はアップリケと刺繍が施されています。アップリケの不思議な形は、リズムをもって私たちに迫ってきます。これは祭礼で身に着けられてきました。同じくクバ王国のショワ族にはカットパイルという技法で知られる“草ビロード（画像2）”があります。線と面であらわされた幾何学的な文様は一つずつ意味を帯びています。ガーナのアシャンティ族による“ケンテクロス（画像3）”にも様々な文様が織り込まれています。このように肌身にまとうものに取り入れられた文様からアフリカ独自の世界観がみえてきます。

装身具についてはマリにて収集されたものを中心に約20点紹介いたします。装身具はテキスタイルや、ヘアスタイル、化粧とともにアフリカを知るための要となります。アフリカのビーズは、貿易の歴史とともに独自の個性が生まれました。ここでは手彩色による貴重なモーリタニアのキーファー（画像6）も出品いたします。また直径5cmもの大ぶりのチベット琥珀を線対称に用い、中央に銀で細工された鳥をポイントにしたネックレス（画像7）も見逃せません。



1：ンチャク、コンゴ民主共和国、クバ王国、ブジョング族、ラフィア



2：草ビロード、コンゴ民主共和国、クバ王国、ショワ族、ラフィア



3：ケンテクロス、ガーナ、アシャンティ族、絹



5：藍絞り染布、カメルーン、グランランド、ムブーン族、綿



4：羊毛と山羊毛の布、マリ、フルベ族



6：キーファー、モーリタニア、陶・ガラス



7：チベット象嵌琥珀ネックレス、マリ、琥珀・銀・陶



### 3. 伝統から発展した現代アートの世界

#### 継承と展開としてのアフリカ現代美術

アフリカに現代美術なんてあるのか？それは数10年～10数年前には、遠く離れた日本とアフリカの間では珍しくないイメージでした。アフリカはせいぜい欧米の芸術を追従する未開の暗黒大陸であり、産業や文化でも途上国の野蛮さの残る国々という偏見と好奇に満ちていました。しかし、現在では地域性や民族性を活かしつつ、現代性の高い洗練された芸術が数多く存在することが、アフリカに限らず世界各地で発掘、再評価、紹介されています。アフリカの数奇な植民地支配の歴史と、その後の近代化と20世紀の社会変動は、アフリカの現代美術の動向にも大きく作用しています。いわゆる西洋美術の模倣ではない、アイデンティティとしての民族性と世界観が色濃く現れているとともに、人間社会と自然の根源的な対峙と融和を想起させる表現にあふれています。それもまた、世界的にアフリカの芸術が注目され、共感を呼んでいる所以なのです。

この展覧会を構成するフリーダ・コレクションの中核をなす、アフリカの現代美術作品群には、そうした特長がふんだんに見て取れます。それは欧米のアートシーン経由ではなく、(サバンナやジャングルではない!)アフリカの都市文化での膨大なフィールドワークにより収集された作品だからです。この展覧会では、1960年代末から東アフリカのタンザニアの首都で始まったティンガティンガアートをはじめ、中央アフリカのコンゴ、ウガンダ、西アフリカのベナン、セネガルなどの重要なアーティストたちによる、さまざまな絵画や立体作品の約80点がご覧いただけます。たとえばベナンの宮廷美術の流れを汲むトクダバの神秘的な絵画、セネガルの巨匠スレイマン・ケイタの抽象画、コンゴの幻の画家タンゴによるカラフルで躍動的な絵画作品、ウガンダのムガルラによる樹皮布への版画などが、多様なアフリカ現代美術を彩ってくれます。中でもタンザニアの天才ジョージ・リランガの精霊(シェターニ)画や立体は、過度な文明社会への危惧や不安を警鐘するとともに、癒しを感じさせてくれる出色の作品です。

これらアフリカの現代美術を通して、既成の美術史的概念を超えた、岐路に立つ文明社会に生きる私たちにとって、自然や世界との対話や拡張が感じられることを願ってやみません。



1 : E.S. ティンガティンガ「ダチョウ」1970年  
エナメル・板



2: ジョージ・リランガ「統一は力なり」  
1993年 エナメル・銅箔キャンバス



4: シプリアン・トクダバ「鉄の神 (チャンゴ)」  
1994年 アクリル・キャンバス



5: スレイマン・ケイタ「無題」  
1994年 ミックスドメディア



3: フランソワ・タンゴ「黒い魔術師」  
1970年頃 油彩・キャンバス



6: ムガルラ・ムキビ「無題」  
2001年 ステンシル・樹皮布 (タバ)